
魔法少女リリカルなのは×魔法少女まどか☆マギカ～魔法少女達の軌跡～

死神帝国

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは×魔法少女まどか☆マギカ〜魔法少女達の軌跡〜

【Nコード】

N7479R

【作者名】

死神帝国

【あらすじ】

これは、TVアニメ版「魔法少女リリカルなのは」シリーズと魔法少女まどか☆マギカのクロスオーバーです。
楽しめる作品になっていると思います。

第1話　これは不思議な出会いなの？（前書き）

この広い空の下には、幾千、幾万の人たちが居て
いろいろな人が願いや想いを抱いて暮らしていて。

その想いは時に触れ合って、ぶつかりあって

だけど、その中のいくつかは、きっと繋がっていきける。

伝え合っていきける。これから始まるのは、

そんな、出会いとふれあいのお話。

それでは、楽しんでいってください。

・・・スタンバイ・・・レディ？

第1話　これは不思議な出会いなの？

空が紅に染まる森の中。そこに少年はいた。
少年は、左手に傷を負っていた。

「ハア・・・ハア・・・くっ・・・くっ」

そして少年の後ろに、赤い2つの目が草木の間から光った。
風が少年のマントをたなびかせる。少年は、赤い玉を取り出した。
すると、赤い玉が光り始める。少年は掌を前に突き出した。
そこから、魔方陣が展開される。そのとき、日が昇り始めていた。
魔方陣は、さっきより小さくなっている。
そこに、赤く光輝く2つの目が草木の中からとび出した。

「グオオオオオオオオオ！！！」

そいつは、勢いよく少年に向かってくる。
少年は、何かを唱え始めた。

「栄えあるもの光となれ、許されざるものを封印の輪に」

そのとき、月を背にして謎の獣は飛び上がり少年に襲い掛かった。

「ジュエルシード封印！」

という少年の言葉と共に魔方陣は輝きを増した。
そして、魔方陣に謎の獣は突っ込んだ。
魔方陣は、さっきよりもさらに輝きを増した。木々がざわめいている。

「オオオオオオオオ！」

謎の獣は、雄叫びおたけをあげながら宙に舞う。体の破片が崩れ、地面に散っていく。

しかし、そこで少年の魔方陣も消えた。

謎の獣は、魔方陣が消えたところを狙って体を引きずりながら森の中に逃げていった。

少年は、力が抜けたように両膝と右手が地面についた。

「にがし．．．ちゃった」

「おいかけ．．．なく．．．ちゃ」

少年は、そう言うのと地面にうつぶせに倒れた。

だれか、僕の声を聞いて。力を貸して．．．魔法の力を．．．

少年は光り輝きだした。光が消えると、そこには少年の姿はなく、小さな動物と赤い玉だけが残っていた．．．

ここは、とある町・・・何千とある家、その中のひとつに少女は住んでいる。

携帯電話の目覚ましタイマーが起動し布団をかぶりながら携帯をとろうとするが・・・落ちた。

少女は、布団から手を出し携帯の場所を探る・・・そして、携帯を取り、タイマーを止めた。

少女は、ベットから起き上がりふぁぁとあくびをした。

「何か、変な夢見ちゃった…」

少女は、んんんという声と共に伸びをした。

少女は、鏡の前で髪を結んでいる。

私、高町なのは。私立聖祥大付属小学校に通う、小学3年生。ここ、高町家においては、三人兄弟の末っ子さんです。

なのはは、食卓へつくと、

「おはよー」

なのはは、両親に挨拶をする。

「あ、なのは、おはよう」

「おはよう、なのは」

母は、なのはにコップがのっているおぼんを渡した。

「はい、これ。お願いね」

「はい」

この二人が、私のお父さんとお母さん

「ちゃんと一人で起きれたな、えらいぞー」

父がおぼんからコップを手に取りなのはに言った。

こちら、お父さんの高町士郎さん。

駅前の喫茶店、翠屋のマスターさんで、一家の大黒柱さん。

「朝ごはん、もうすぐ出来るからね」

で、お母さんの高町桃子さん。喫茶翠屋のお菓子職人さん。

綺麗で優しい、なのはの大好きなお母さん。

ちなみに、翠屋は駅前商店街の真ん中にある、ケーキとシュークリム、

自家焙煎ばいせんコーヒーが自慢の喫茶店。

学校帰りの女の子や、近所の奥様に人気のお店なの。

「お兄ちゃんとお姉ちゃんは？」

なのはが尋ねる。

「ああ、道場にいるんじゃないか？」

道場に行くとお姉ちゃんが素振りをしていて、お兄ちゃんがそれを見てあげていた。

なのはは、戸を開け、

「お兄ちゃんお姉ちゃんおはよう、朝ごはんだよー」

「おはよう」

お姉ちゃんが素振りをやめて

「ああ、なのは、おはよう」

「はい」

なのはは、タオルをお姉ちゃんに向かって投げた。
それをお姉ちゃんが受け取る。

「ありがとう」

この二人が、私のお兄ちゃんとお姉ちゃん

「じゃあみゆき、今朝はここまで」

お兄ちゃんの高町恭也さんは、大学一年生。

お父さん直伝の剣術家で、お姉ちゃんのお師匠さま。

「はい、じゃあ続きは学校から帰ってからね？」

で、お姉ちゃん。高町みゆきさんは、高校2年生

食卓には、彩り綺麗な料理が並んでいる。

「んー、今朝もおいしいなあ、特にこの、スクランブルエッグが」

「本当ー？トッピングのトマトとチーズと、それからバジルが隠し味なのー」

「みんなアレだぞ？こんな料理上手なお母さんをもって、幸せなんだから、わかってんのか？」

お父さんは、笑いながら言った。

「わかってるよ、ね、なのは」

「うん」

「もうやだ、あなたったら」

お母さんは、少し照れながらお父さんのほうに向いて笑った。

高町家の両親は、未だ新婚気分バリバリです。

「みゆき、リボンが曲がってる」

「え？ ホント？」

「ほら、貸してみろ」

そう言っ、お兄ちゃんはお姉ちゃんのリボンを直してあげた。

で、お兄ちゃんとお姉ちゃんもとっても仲良しで、愛されてる自覚はとってもありますが、

この一家の中では、なのはもしかして微妙に浮いているかもしれない。

「おはようございます」

なのはは、バスの運転手さんに挨拶をする。

「なのはちゃん」

「なのはー、こっちこっちー」

「すずかちゃん、アリサちゃん」

「おはよう」

アリサは挨拶を交わすと少し横に移動し真ん中を空けた。

「おはようなのはちゃん」

すずかも挨拶を返す。

「おはよう」

バスは、扉が閉まり発進した。

アリサ・バニングスちゃんと、月村すずかちゃんの二人とは、1年生のころから同じクラス。
今年からは同じ塾にも通ってるの。

「この前みんなに調べてもらったとおり、この町にはたくさんのお店がありましたね。」

そこで働く人たちの様子や工夫を、実際に見て、聞いて、大変勉強になったと思います。

このように、いろいろな場所で、いろいろな仕事があるわけですが、
みんなは将来どんなお仕事に就きたいですか？今から考えてみるのも、いいかもしれませんね」

チャイムが鳴った。

「起立」

「将来かー。アリサちゃんとすずかちゃんは、もう結構決まってるんだよね？」

なのはは、タコさんウィンナーを食べながら尋ねる。

「ウチはお父さんもお母さんも会社経営だし、いっぱい勉強して、ちゃんと後を継がなきゃ、
くらいけど？」

「私は機械系が好きだから、工学系で専門職がいいなあ、と思ってるけど」

すずかは、ご飯を一口、口に運んだ。

「そっかあ、二人ともすごいよねえ」

「でもなのはは喫茶翠屋の二代目じゃないの？」

アリサの問いにうつむいて答える。

「うん、それも将来のヴィジョンのひとつではあるんだけど…。やりたいことは、何かあるような気もするんだけど…。まだそれが何なのかハッキリしないんだ…。

私、特技も取り柄も特に無いし」

「バカチン！自分からそういうことを言うんじゃないの！」

アリサがなのはの頬にレモン（輪切りにした一切れ）を投げる。

「そうだよ、なのはちゃんにしか出来ないこと、きっとあるよ？」

「大体アンタ、理数の成績は、このアタシよりいいじゃないの！それで取り柄が無いとは、どの口でいうわけ！？ああん！？」

アリサはなのはを指差して言う。そして、なのはの頬をつまんだ。なのはは、うああと声を出してつままれたまま

「だってなのは、文系苦手だし、体育も苦手だし」

「あ、二人とも、駄目だよ、ねえ、ねえったら！」

すずかは、アリサを止めに入った。

自分に出来ること、自分にしか出来ないこと、かあ：

なのはは、空がオレンジ色に染まる頃ぽつんと呟いた。

「ねえ、今日のすずか、ドッジボール凄かったよねー」

「うん、格好良かったよねー」

「そんなことないよー」

三人で並んで帰っていると犬の散歩をしている人とすれ違った。
そのとき、犬が吠え出した。するとアリサが

「Be quiet！」

と犬に向かって言うのであった。

「あ、こっちこっち。ここを通ると塾に行くのに近道なんだ」

「あ、そうなの？」

「ちょっと、道悪いけどね」

そして、アリサを先頭に歩き出した。

「ここ…、夕べ夢で見た場所…」

「どうしたの…？」

「なのは？」

「あ、ううん、なんでもない！ごめんごめん」

なのはは、慌てて答える。

「大丈夫？」

「うん」

「じゃあ行こ」

とアリサが言った。

「まさかね…」

「なのはちゃん？」

「あ、うん」

なのはは、少し立ち止まってから後を追った。

歩いているとなのはの頭を不思議な声がよぎった。

「助けて…」

「なのは？」

とアリサが声をかける。

「今、何か聞こえなかった？」

「何か？」

「何か、声みたいなの」

なのはは、2人に尋ねた。

「別に…」

「聞こえなかった…かな？」

三人は、辺りを見回した。

「助けて…！」

なのはは、突然走り出した。

「なのは！」

「なのはちゃん！」

なのはは、息を切らして走りながら、思った。

多分、こっちの方から

そこでなのはは、小さい動物が倒れているのを見つけた。
その動物の首には、赤い宝石のような玉が付いていた。
なのはは、動物に手を支えてあげる。

「どうしたのよなのは、急に走り出して」

「あ、見て、動物…？怪我してるみたい…」

「あ、うん…、ど、どうしよう…？」

「どうしようって…、とりあえず病院？」

三人は慌てている。

「獣医さんだよっ」

「えーと、この近くに獣医さんってあったっけ？」

「あー、えーと、この辺りだと確か…」

「待つて、家に電話してみる」

そのとき、小さな動物はぐったりとしていた。

「怪我はそんなに深くないけど、随分衰弱してるみたいねえ。
きつと、ずっと一人ぼっちだったんじゃないかなあ」

「院長先生、ありがとうございます」

なのはがお礼を言う、それに続いてアリサとすすかもお礼を言った。
「ありがとうございます」

「いいえ、どういたしまして」

「先生、これってフェレットですよ？どこかのペットなんですよか？」

アリサが尋ねる。

「フェレット…なのかな？変わった種類だけ…。
それに、この首輪についてるのは…。宝石…なのかな？」

「起きた…」

三人が不思議そうに眺めている。フェレット(?)は、きよろきよろと辺りを見回す。

「見てる…」

「なのは、見られてる」

「え、あ、うん…。えっと、えっと…」

なのはは、指を出した。すると、フェレット(?)はペロツと指先をなめた。

それに、感嘆の声をあげるなのは達。しかし、すぐにぐったりと倒れてしまった。

「しばらく安静にした方がよさそうだから、とりあえず、明日まで預かっておこうか？」

「はい、おねがいます！」

三人は、院長先生にお願いした。

「よかったら、また明日様子を見に来てくれるかな？」

「わかりました！」

三人は、返事を返した。

「あ、やばっ、塾の時間！」

「ホントだ！」

「じゃ、じゃあ、院長先生、すいません、また明日来まーす」

なのはの挨拶に院長先生は手を振って見送った。

「じゃあ、この前やった所の応用問題から始めましょう。テキストの47Pの最初から。」

例題を見てみましょう。例題の1は45分の39。分母も、分子も、3で割れます。ですから、15分の13」

三人は、塾の講義中にさっきのフェレット(?)をどうするか紙をまわして決めていた。

うーん、ウチも食べ物商売だから原則としてペットの飼育は駄目だし…

と心の中で呟いていると不意に先生の声が聞こえた。

「はい、それではこの問題の答えを…。じゃあ29番、高町さん」

「あ、はい！」

「47Pの問の3よ」

アリサにページをお教えてもらい慌てて答える。

「えーと、えーっと…。42分の5です！」

「はい、正解。えー、式の途中で答えが出たと思ってやめてしま
う人が……。」

先生の声を聞いて、ほっとするなのは。

「やるー」

「ナイス」

アリサとすずかの言葉になのはは、照れながら反応する。

「この場合も、約分できる分数はきちんと約分しなければ正解には
なりませんよ。」

それが終わっても安心しないで、今度は……。」

夜になって、なのははお父さんの前で説得していた。

「というわけで、そのフェレットさんをしばらくウチで預かるわけにはいかないかなーって」

「フェレットかぁ…。ところでなんだ？フェレットって」

食卓にいる一同がぐつとなった。そこに、お兄ちゃんとお姉ちゃんの説明が入った。

「イタチの仲間だよ、父さん」

「だいぶ前から、ペットとして人気の動物なんだよ」

「フェレットって、ちっちゃいわよね？」

「知ってるのか？」

お父さんは、驚きながら言った。

「うーんと、これくらい」

なのはは、手を使って大きさを表す。

「しばらく預かるだけなら、カゴに入れておけて、なのはがちゃんとお世話できるならいいかも。」

恭也、みゆき、どう？」

「俺は、特に異存は無いけど」

「私も」

「うん。だそうだよ？」

お父さんは、うなずきながら言った。

「よかったわね」

「ありがとう！」

なのはは、お父さんにお礼を言った。

「さ、冷めない内に食べちゃってね」

「はい」

なのはとみゆきが返事をする。

「桃子、サラダとってくれるか」

「はい、どうぞ」

「俺も」

「はいはい」

なのはは、その晩2人にメールを送った。

‘、アリサちゃん、すずかちゃん、あの子はウチで預かれることになりました。

明日、学校帰りに一緒に迎えにいきましょうね

なのは、

「送信っ」と

なのはが携帯を置いてベッドに向かおうとしたとき、また不思議な声が頭に届いた。

なのはは、不思議な空間にいる。

「聞こえますか？僕の声が…。聞こえますか？」

「夕べの夢と、昼間の声と、同じ声…」

「聞いてください、僕の声が聞こえるあなた、お願いです。僕に少しだけ、力を貸してください！」

「あの子がしゃべってるの…？」

「お願い、僕のところへ！時間が、危険が、もう…！」

そう言った途端、不思議な空間から一気に開放された。なのはは、ベッドの上に倒れこんだ。

「お願い、届いて…」

なのはは、夜の道を駆けていた。息を切らしながら。そして、夕方きた動物病院の前で頭痛にみまわれる。辺りの木々がざわつき始めた。

「また、この音…」

気がつくあたりは灰色に変わっていた。

動物病院の窓からフェレットと黒い影がとび出してきた。そして、なのはの横を通り過ぎる。

「あれは…!?!」

黒い影は、フェレットに向かって飛び込んだ。フェレットは、間一髪かわした。

そして木を足場にしてなのはの胸に飛び込んだ。

「なになに、一体何!?!」

「来て…くれたの…?」

「しゃべった!」

なのはは、驚きの声をあげる。そのとき、黒い影がこちらに向いた。なのはは、走り出した。

「その…何がなんだかよくわかんないけど、一体なんなの!?!何が起きてるの!?!」

「君には…資質がある。お願い、僕に少しだけ、力を貸して」

「資質?」

「僕は、ある探し物のために、ここではない世界から来ました。

でも、僕一人の力では思いを遂げられないかもしれない。

だから、迷惑だとわかってはいるんですが、資質を持った人に協力してほしいくて…。

お礼はします、必ずします! 僕の持っている力を、あなたに使ってほしいんです!

僕の力を…魔法の力を!」

フレットは、なのはに頼み込んだ。

「魔法…?」

なのはは、ぽかんとしていた。

そこへ、黒い影が上空から攻撃を仕掛けてきた。なのはは、電柱の後ろに隠れる。

「お礼は、必ずしますから!」

「お礼とか、そんな場合じゃないでしょ?」

「どうすればいいの?」

なのはは、黒い影のほうに向きながら言った。

「これを!」

フレットは、赤く輝く玉を取り出しなのはに渡した。

「暖かい…」

「それを手に、目を閉じて、心を澄ませて。僕のいうとおりに繰り返して」

なのはは、その玉をぎゅっと握った。

「いい? いくよ!」

「うん…!」

なのはは、力強くうなずいた。なのはは静かに目を瞑る。
そして、フェレットの後に続いてなのはは、言葉を繰り返す。

「我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり」

すると、手の中の赤い玉が光り始める。

「契約のもと、その力を解き放て」

「えと…、契約のもと、その力を解き放て」

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「そして、不屈の心は」

「そして、不屈の心は」

そして2人同時に

「この胸に!この手に魔法を!レイジングハート、セット、アップ
!」

なのはは、左手を上にあげる。…すると、赤い玉が光だし声が聞

こえた。

「Stand by Ready. Set up」

そして光は、雲を裂き天に届いた。

「なんて魔力だ…。落ち着いてイメージして！君の魔法を制御する、魔法の杖の姿を！」

そして、君の身を守る、強い衣服の姿を！」

「そんな、急に言われても…」

なのはは、黄色い先端に赤い玉がついた杖と衣服をイメージする。

「と、とりあえず、これで！」

なのはの掌にある赤い玉が光を放ち、杖が創られる。

その杖を手に取り、なのはは衣服を身にまとった。髪の毛は白い紐で結ばれている。

「成功だ！」

「ふえ、ふえー？嘘！？な、なんなの、これっ？」

なのはは、自分の姿に驚く。黒い影がこちらを睨んでいる。

「えー！？」

第1話　これは不思議な出会いなの？（後書き）

どうでしたでしょうか？しばらくは、まどか☆マギカはでないの
ご了承ください。

理由は、なのはのほうをたくさん進ませてからいれようと考えてい
るので・・・

感想等お待ちしております。

第2話 魔法の呪文はリリカルなの？（前書き）

平凡な小学三年生だったはずの、私、高町なのはに訪れた、突然の事態。

渡されたのは、赤い宝石。手にしたのは魔法の力。

出会いが導く偶然が、今光を放って動き出していく。

繋がる想いと、始まる物語。

それは、魔法と日常が平行する日々のスタート。

s t u b y r e d y ?

第2話 魔法の呪文はリリカルなの？

「嘘…、なんなの？これ…？」

なのはは、身につけている衣服をみてそう言った。

振り向くとそこには黒い影がこちらを向いている。

「ふえー…」

なのはは、二、三步後ろに下がったところで壁に背中が当たった。

「ふえー？これ何ー？」

黒い影がこちらに近付いてくる。

「きますす！」

黒い影は、高く飛びなのはに向かって攻撃してきた。なのはは、一歩も動けなかった。

そのとき、

「Protection」

なのはの前に魔法のバリアーが張られた。

黒い影は、バリアーにぶつかった。その後、黒い影は破片となって壁や電柱に散った。

一本の電柱が倒れた。

「ふえー？」

なのはは、レイジングハートを片手に持ち、ユーノを抱えながら走っている。

「僕らの魔法は、発動体に組み込んだ、プログラムと呼ばれる方式です。

そして、その方式を発動させるために必要なのは、術者の精神エネルギーです。

そしてあれは、忌わしい力の元に生み出されてしまった思念体…。あれを停止させるには、その杖で封印して、元の姿に戻さないといけないんです」

「よくわかんないけど、どうすれば？」

「さっきみたいに、攻撃や防御などの基本魔法は、

心に願うだけで発動しますが、より大きな力を必要とする

魔法には、呪文が必要なんです」

「呪文？」

「心を済ませて。心の中に、あなたの呪文が浮かぶはずですよ」

なのはは、目を瞑つむった。

黒い影がこちらに向かってくる……。そして、飛び上がり鞭のようなものをなのははに向けて放った。

なのはは、レイジングハートを黒い影の方に向けた。

「Protection」

その音声と共にバリアーが張られた。黒い影は、少しひるんだ。

「リリカルマジカル」

「封印すべきは、忌わしき器！ジュエルシード！」

「ジュエルシード、封印！」

「Sealing Mode. Setup」

すると、レイジングハートの先から翼が生えた。

そして、無数のピンク色の線が黒い影に向かって放たれた。・・・そして、黒い影を縛る。

「ぐおおおおお！」

黒い影は、雄たけびをあげた。そして、額にXXIという数字が現れた。

「Stand by Ready」

「リリカルマジカル、ジュエルシード、シリアル21、封印！」

「Sealing」

レイジングハートから光が放たれ無数のピンク色の線が黒い影に攻撃する。

すると、黒い影は光になって散った。なのはは、地上に降りてきた。

「あっ」

なのはは、遠くで光る物に近付いた。

「これが、ジュエルシードです。レイジングハートで触れて」

すると、ジュエルシードはレイジングハートに近付いてきた。
そして、レイジングハートの中に入った。

「R e c e i p t n u m b e r X X I」

なのはの体からピンク色の光が放たれた。すると、変身が解けて私服に戻った。

レイジングハートに光が集まり、赤い玉へと戻った。

「あ、あれ？終わったの？」

「はい、あなたのおかげで…。ありがとう…」

フレット(?)はそう言って倒れてしまった。

「ちょっと、大丈夫？ねえ！」

なのはは、周りを見た。

「もしかしたら…、私、ここに居ると大変アレなのは…。
とりあえず…、ご、ごめんなさ〜い！」

そしてジュエルシードと戦った場所を後にして、走り出した。

なのはは、どこかの公園に息を切らしながら入っていく。
そして、街頭のライトが当たるベンチに座った。

「すみません」

「あ、起こしちゃった？ごめんね乱暴で…。怪我、痛くない？」

「怪我は平気です。もうほとんど治っているから」

ユーノは、包帯を外した。なのはがフェレット(?)を持ち上げた。

「本当だー、怪我の痕がほとんど消えてる…。すごーい・・・」

「助けてくれたおかげで、残った魔力を治療にまわしました」

「よくわかんないけど、そうなんだ。ね、自己紹介していい？」

「あ、うん」

なのはは、えへんと咳払いしてから、

「私、高町なのは。小学校3年生。家族とか仲良しの友達は、なのはって呼ぶよ」

「僕は、ユーノ・スクライア。スクライアは部族名だから、ユーノが名前です」

「ユーノ君かあ、可愛い名前だね」

ユーノは、深々と頭を下げながら言った。

「すみません…、あなたを…」

「なのはだよ」

そういつて、ユーノを持ち上げる。

「なのはさんを巻き込んでしまいました…」

なのは「あ、その…、えーと、多分、私平気。あ、そだ、ユーノ君怪我してるんだし、

ここじゃ落ち着かないよね。とりあえず、私の家に行きましょ。

後のことはそれから。ね？」

なのはは見つからないように玄関の戸を開けようとした、そのとき、

「おかえり」

なのはは、とっさにユーノを後ろに隠す。

「お兄ちゃん…」

「こんな時間に、どこにお出かけだ？」

「あの、その、えーと、えと…」

すると、後ろからお姉ちゃんの声がした。

「あら可愛い」

「あ、お、お姉ちゃん…？」

「あら？何か元気ないね。なのははこの子の事が心配で様子を見に行っただけだね」

「えーと、あと、その…」

「気持ちとはわかんなくてもないが、だからといって内緒でというのはいただけない」

お兄ちゃんの口調は、怒っていた。

「まあまあ、いいじゃない。こうして無事に戻ってきてるんだし。それになのは良い子だから、もうこんなことしないもんね？」

「うん、その、お兄ちゃん？内緒で出かけて、心配かけてごめんなさい」

「はい、これで解決」

みゆきがユーノを持ち上げて言った。

「でも可愛い動物ねー。母さんなんか、この子見たら可愛すぎて悶絶しちゃうんじゃない？」

「その可能性は否定できんな」

ここは、とある神社。．．．．．そこにまた新たなジュエルシードがあった。

翌日の朝、なのはは携帯のアラームを止めるため布団の中から手を出して探る。

携帯が床に落ちた．．．そして、手を伸ばす。携帯に触れるとアラームを止めベットから起き上がる。

ふぁあとあくびをしてからカーテンを開ける。

「おはよ、ユーノ君」

「あ、その、おはよ」

ユーノは、小さいバスケットの中で夜を過ごしたようだ．．．しつかりと布が布団代わりになっている。

なのはは制服に着替えて、鏡の前で髪を結んでいる。

「えっと、とりあえず夕べは、お疲れ様」

「それは、こちらこそ」

夕べ、お父さんとお母さんにユーノ君を見せたら：

「わー、可愛い。ホント、可愛いわよねえ」

お母さんは、ユーノ君に頼ずりをしている。

「お母さん、ほどほどに」

「うん、中々賢そうなイタチじゃないか」

「フレットだよ、父さん」

「何か、芸とかできるのかなあ？ほれ、お手」

そういつて、お父さんはユーノ君に手をさし出した。

「「おお」」

2人は、感嘆の声を漏らした。

「ホント、賢いわねえ」

と、大騒ぎで…。その後もユーノ君のご飯についてとか、その他色々ドタバタしてて、ほとんどお話出来なくなつて…。

「名前で呼ぶの慣れてくれた？」

「うん、なのは」

出来たお話は、普通に名前を呼んで、普通にお話してね、ってことくらい

「じゃあ私、学校へ行かないといけないから、帰ってきたらお話聞かせて？」

なのはは、部屋から出る前にユーノのほうへ振り向いた。

「あ、大丈夫、離れていても、話ができるよ」

「ふえ？」

（なのははもう、魔法使いなんだよ）

「あ、これ……。私を呼んだ時の……」

（そう、レイジングハートを身に着けたまま、心で僕にしゃべってみて）

「えーっと……」

なのはは、レイジングハートを握り胸の前に持ってくる。

（こう？）

（そう、簡単でしょ？）

「わー、本当だー！」

（あいてる時間に色々話すよ、僕のこととか、魔法のこととか、ジュエルシードのこととか）

ユーノは、心でなのはに伝えた。

「うん」

「おはよー」

「なのは、夕べの話聞いた？」

アリサがなのはに尋ねた。

「へ？夕べって？」

「昨日行った病院で、車の事故か何かあったらしくて、壁が壊れちゃったんだって…」

さすがが不安そうに言う。

「あのフェレットも無事かどうか心配で…」

アリサは、少しうつむいた。

「あ、えーとね、その件はその…」

なのはは、少し戸惑った。

「そっかー、無事でなのははの家に居るんだー」

「でもすごい偶然だったね、たまたま逃げ出してたあの子と、道で
ばったり会うなんて」

「ねー」

アリサとすずかは、微笑みながら喋っている。

嘘はついてない嘘はついてない、ちょっと、ちょこつと真実とぼか
しただけ！

なのはは、苦笑いしながら呟いた。

アリサとすずかはきよとした顔でなのはを見ている。

「あー、それでね！何だかあの子、飼いフェレットじゃないみたい
で、

当分の間、ウチで預かることになったよー」

「そうなんだー」

「名前つけてあげなきゃ。もう決めてる？」

「うん、ユーノ君って名前」

「ユーノ君？」

アリサは、少しだけ？な表情だった。

「うん、ユーノ君」

「へえ」

「この前お話した通り、漢字は編と作りで出来ています。

それを組み合わせることで、漢字はひとつの文字でも、色々な意味を持っているのです。

それは、編には編の意味、作りには作りの意味があるからです。

たとえば、人間を表すのは人間、水を表すのはさんずい、木を表すのは木編ですね。

それではちょっとクイズです。今の三つの編にピッタリあう・・・

」

（ジュエルシードは、僕らの世界の古代遺産なんだ。

本来は、手にしたものの願いを叶える、魔法の石なんだけど・・・

力の発現が不安定で、夕べみたいに単体で暴走して、

使用者を求めて周囲に危害を加える場合もあるし、

たまたま見つけた人や動物が、間違って使用してしまって、

それを取り込んで暴走することもある）

（そんな危ないものが、何でウチのご近所に？）

（僕のせいなんだ…。僕は故郷で、遺跡発掘を仕事にしているんだ。そしてある日、古い遺跡の中でアレを発見して、調査団に以来して保管してもらったんだけど…。

運んでいた時空艦船が、事故か何らかの人為的災害にあってしまっ
て…。

21個のジュエルシードは、この世界に散らばってしまった今ま
で見つけられたのはたった二つ）

（あと19個かあ…）

「起立」

「鳳仙花なんかは、かなり伸びてるんじゃないですか？何センチく
らいかな？」

先生の理科の授業が始まった。

（あれ？でもちよつとまって、話を聞く限りでは、ジュエルシード
が散らばっちゃったのって、

別に、全然ユーノ君のせいじゃないんじゃない？）

（だけど、アレを見つけてしまったのは僕だから…。

全部見つけて、ちゃんとあるべき場所に返さないと、駄目だから
…）

ユーノは少しだけ不安な表情になった。

（何となく、何となくだけど、ユーノ君の気持ち、わかるかもしれない。）

真面目なんだね、ユーノ君は）

「え？」

ユーノは、いきなりだったので驚いた。

「あーそうそう、観察中って書いた札は立てておきましたか？
雑草と間違えてむしられちゃったら大変ですからね？」

数人の生徒が笑い出す。

「もちろん、自分の名前と、種を植えた日付も忘れないでください」

（えーと、夕べは巻き込んだじゃって、助けてもらって本当に申し訳
なかったけど…。

この後は、僕の魔力が戻るまでの間、ほんの少し休ませてもらい
たいだけなんだ…。

一週間、いや5日もあれば力が戻るから、それまで…)

（戻ったら、どうするの？）

なのはは、心配そうに尋ねる。

（また一人で、ジュエルシードを探しに出るよ）

（それはだーめ）

なのはは、きっぱりと言った。……まるで、母親のように。

（だ、駄目って…）

（あたし、学校と塾の時間は無理だけど、それ以外の時間なら手伝えるから）

（だけど、昨日みたいに危ない事もあるんだよ？）

（だって、もう知り合っちゃったし、話も聞いちゃったもん。

ほっとけないよ。それに、夕べみたいな事が近所で度々あったりしたら、

皆さんのご迷惑になっちゃうし、ね。

ユーノ君、一人ぼっちで、助けてくれる人、居ないんでしょ？

一人ぼっちは寂しいもん、私にもお手伝いさせて）

（困っている人が居て、助けてあげられる力が自分にあるなら、その時は迷っちゃいけないって、これ、ウチのお父さんの教え）

「はー、いててて」

アリサがなのはの髪を引っ張った。……隣では、すずかがくすくすと笑っていた。

放課後、なのは、アリサ、すずかの3人で帰った。

（ユーノ君が困ってて、私は、ユーノ君を助けてあげられるんだよね。魔法の力で）

(…うん)

(私、ちゃんと魔法使いになれるかどうかあんまり自信ないんだけど)

なのはとアリサは、すずかの家の前まで来てすずかと手を振って別れた。

(なのははもう魔法使いだよ。多分僕なんかよりずっと才能がある)

(そうなの？自分ではよくわからないんだけど、とりあえず色々教えて？)

アリサの迎えが来た。なのはは、アリサの乗ってく？を断わり

「ばいばい」

と言いながら手を振り別れた。

なのはは、走り出した。

(私、がんばるから！)

(うん、ありがとう…)

(さて、もうすぐウチに着くよー。とりあえず、一緒におやつを食べようかー)

(あ、うん、ありがとう)

(今日のおやつはなにかなー)

なのはは、初めての戦闘のときと同じ感じになった。
開放され、男性とぶつかった。

「あっ、すみません」

謝った後にユーノに問いかける。

(ユーノ君、今のって…)

(新しいジュエルシールドが発動している…。すぐ近く！)

(どうすれば!?)

(一緒に向かおう。手伝って！)

(うん)

なのはは、また駆け出した。

神社では、人を襲おうとする黒い影があった。

なのは達は、神社の階段を駆け上がっていく。

「なのは、レイジングハートを！」

「あ、うん！」

「現住生物を取り込んでる…」

「どうなるの…？」

黒い影が雄たけびをあげる。

「ぐおおおおおおお」

「実体がある分、手強くなってる」

「大丈夫、多分」

「なのは！レイジングハートの起動を！」

「ふえっ？起動ってなんだっけ！？」

なのはは、ぽかんとしている。ユーノは、慌ててなのはの肩に乗り

「我を使命をから始まる、起動パスワードを！」

「え〜？あんな長いの、覚えてないよ〜」

「もっかい言うから繰り返して！」

「わ、わかった！」

そのときだった、黒い影がなのはに襲いかかる。

すると、レイジングハートが光を放った。

「レイジング…ハート…？」

「Stand by Ready. Setup」

そして、レイジングハートは赤い玉から杖の状態に変わった。

（パスワードなしでレイジングハートを起動させた…）

ユーノは、驚いた。しかしすぐになのはに指示を出す。

「なのは、防護服を！」

「ふえ？あ、ふぁえ！？」

「Barrier Jacket」

「なのは！」

ユーノは、叫んだ。なのはは、煙の中から最初の戦闘のときと同じ服を着ていた。

黒い影は、なのはに襲い掛かった…。しかし、それをバリアーが防ぐ。

「Protection Condition.. All green」

（あの衝撃をノーダメージで…。やっぱりだ…、この子、すごい才能を持ってる！）

黒い影は、その場に倒れ込んだ。

「いたた…っていうほど痛くはないかなあ。えと、封印ってのをすればいいんだよね。」

レイジングハート、お願いね」

「All right. Sealing Mode. Set up」

レイジングハートから翼が生える。そして、ピンクの線が黒い影を縛る。

すると、額からXVIの数字が浮かび上がった。

「Stand by ready」

「リリカルマジカル、ジュエルシード、シリアルXVI、封印！」

「Sealing」

「Receipt number XVI」

黒い影は、光となって散った。そして、ジュエルシードが近付いてくる。

そして、レイジングハートに入った。

「ふう。これでいいのかな？」

「うん…、これ以上ないくらいに…」

その言葉になのはは、微笑んだ。

「頭でも打ったかな…?」

飼い主は、愛犬と共に神社を後にした。……その頃には、もう日が沈みかかっていた。

その空は綺麗なオレンジ色をしていた。

「お疲れ様、かな？」

「うん、そうだね」

私、高町なのはが始めて魔法使いになってからの長い一日がやっと終わっていきます。

新しく出来た友達、ユーノ君の事。魔法の事。不安な事や、よくわからないこと。

とにかく、たくさんあるんですが……

「それにしても、お腹減ったねー」

なのはは、ユーノに話しかけた。ユーノは軽く微笑んだ。

とりあえず、色々頑張っていかなきゃ、と思います！

なのはは、夕日の光が差す神社で呟いた。

第2話 魔法の呪文はリリカルなの？（後書き）

どうでしたか？

次回は、4月5日までに投稿です。

これから宜しく願います。

第3話 町は危険がいっぱいなのか？（前書き）

だいぶおそくなつてしまいました。

本当にすみません。これからは、不定期な投稿になってしまうかもしれません。

これからよろしくお願いします。

平凡な小学三年生だったはずの私、高町なのはに訪れた突然の事態。渡されたのは赤い宝石、手にしたのは魔法の力。

出会いが導く偶然が、今、静かに動き始めて。

立ち向かっていく日々、俯かないように。

それでは、stand by... ready?

第3話 町は危険がいっぱいなのか？

こんばんわ、高町なのはです。いつもは平凡な小学校3年生なのですが、最近はこう、色々ありまして

「Stand by ready」

「ジュエルシードシリアルXX！封印！」

「Sealing」

音声と共に光が上空に放たれた。

なのはは、肩で息をしている。と同時にレイジングハートから白い煙が噴き出した。

「なのは、お疲れ様」

えーと…、魔法少女とか、やってるんですが…

「なのは、大丈夫？」

なのはの変身が解除されふらふらと歩くなのはにユーノが声をかける。

「大丈夫、なんだけど…。少し、疲れた…」

なのはは、まるで緊張の糸が切れたみたいに道にぱたっと倒れてしまった。

「なのは、なのは、大丈夫!？」

小鳥のさえずりも聞こえる暖かい朝。なのはは、まだ布団に入っただけのまま寝ていた。

「なのは、朝だよ、そろそろ起きなきゃ」

ユーノがなのはに呼びかける。

「今日は日曜だし、もうちょっとお寝坊させて…」

「なのは、なのは、起きないの、ねー、なのは。なのは、おーい、なのは、なのはってばあ」

私、高町なのは、小学三年生。偶然の出会いとめぐり合わせで、別世界から来た魔法使い、ユーノ君と出会って…。昼間は普通に、小学生。

夕方や夜は魔法少女として、ユーノ君の探し物、ジュエルシードを探し集める日々

「Confirmation」

音声と共に今まで集めたジュエルシードが出てきた。

ユーノ君とであって1週間。集めたジュエルシードは現在5つ。私なのも魔法少女として、いくらか様になってきたような気がするのですが…

なのはは、はあっとため息をついた。

「なのは、今日はとりあえずゆっくり休んだほうがいいよ」

ユーノは、心配な顔つきでなのはに言った。

「うん…でも…」

「今日はおやすみ。もう5つも集めてもらったんだから、少しは休まないともたないよ。」

それに今日は約束があるんでしょ」

「うん…、そうだね…。じゃあ、今日はちょっとだけジュエルシード探し休憩ってことで」

なのはは、ベットから起き上がった。

「うん」

元氣よく、グラウンドでサッカーボールを追いかける子供達がいる。

今日は、うちのお父さん、高町士郎さんがコーチ兼オーナーをしているサッカーチーム、

翠屋JFCの試合の日。

それを私と、アリサちゃんとすずかちゃん、みんなで応援しようねって約束してたんです。

なのは達3人は、ベンチに座っている。

「さて、応援席も埋まってきたことですし、そろそろ試合を始めますか」

と、お父さんが相手の監督さんに言った。

「ですな」

監督さんは、お父さんへ返事を返した。

晴れ渡る青空の下、試合開始のホイッスルが鳴り響いた。

「がんばれがんばれー！みんなー！がんばってー！」

（これって、こっちの世界のスポーツなんだよね？）

（ん？うん、そうだよ。サッカーっていうの）

なのはは、ユーノに説明する。

翠屋JFCの選手がゴールを決めた。と共に観客席からわあっと歓声があがった。

（ボールを脚で蹴って、相手のゴールに入れたら1点。手を使っていいのは、

ゴールの前にいる一人だけで）

（へー、面白そうだね）

そうこうしている内に相手チームの選手がシュートを放つ。
それをキーパーがダイビングして止めた。

「キーパーすごい！」

「ほんとー！」

アリサの言葉にすずかも続く。

「あがれあがれー！」

翠屋JFC側のベンチ入り選手が声をあげる。

（ユーノ君の世界には、こういうスポーツとか、あるの？）

（あるよ。僕は研究と発掘ばかりで、あんまりやってなかったけど）

（にゃはは、私と一緒にだ。スポーツはちょっと苦手）

なのはは、苦笑いしながら言った。

「試合終了ー！2…0で、翠屋JFCの勝利！」

ジャッジの合図で試合が終わった。結果は、2対0で翠屋JFCの勝利。

翠屋JFCの選手達はみんな笑顔で喜んでいる。

「よーし、みんながんばった！良い出来だったぞ！練習どおりだ！」

「はい！」

「じゃ、勝ったお祝いに、飯でも食うか！」

お父さんの言葉に選手の皆様がおー！と声を出す。
今日の翠屋は、満席になった。

そして、外ではなのは達3人がユーノについて話している。

「それにしても、改めてみると何かこの子、フェレットとはちよつと違う？」

「そういえばそうかなあ。動物病院の院長先生も、変わった子だねって言ってたし」

なのはは、少しギクツとした顔つきになった。

「あー、えーと、まあちよつと変わったフェレットってことで！ほらユーノ君、お手！」

ユーノは、なのはの手にお手をする。

「可愛い」

さすがが一言、

「賢い賢い」

その後アリサがユーノの頭を撫でた。

「可愛い」

「えらいな」

アリサに続きすずかもユーノの頭を撫でた。ユーノは、少し困った顔をしている。

（ごめんねユーノ君…）

（だ、大丈夫…）

2人は、少しの間苦笑いが続いた。

「ごちそうさまでしたー！」

選手達は、声をそろえて言った。

「ありがとうございましたー！」

「みんな、今日はすっげーいい出来だったぞ！
来週からまたしっかり練習がんばって、次の大会でもこの調子で
勝とうな！」

「はい！」

「じゃ、みんな解散。気をつけて帰るんだぞ」

「ありがとうございますー！」

選手達は声をそろえてお礼を言った後、自分の家に帰っていった。

おつかれー、じゃーなーなどの言葉やまた今度一緒に練習しようぜーなどの

活気あふれる声も聞こえてくる。

ひとりの少年は鞆のポケットから宝石のようなひし形の石のようなものを取り出し

ズボンのポケットに入れた。

なのはは、はっと何かを感じたような気がして少年に目を向けた。そこにひとりの少女がやってきた。

「お疲れ様」

と少女が言うと

「お疲れ様」

と少年は返答し2人は帰っていった。

（気のせい、だよね…）

「あー、面白かったー、はいなのは！」

「え？」

なのはは、アリサからクタクタになったユーノを渡された。

「さて、じゃあ私たちも解散？」

アリサが聞いた。

「うん、そうだね」

すずかが答える。

「そっか、今日はみんな午後から用があるんだよね」

なのはが聞くと、

「お姉ちゃんとお出かけ」

「パパとお買い物！」

アリサとすずかは嬉しそうに答えた。

「いいねえ。月曜日にお話聞かせてね」

「お、みんなも解散か？」

そこへ父・士郎がやってきた。

「あ、お父さん！」

「今日はお誘いいただきまして、ありがとうございました！」

アリサが丁寧にお礼を言う。

「試合、かつこよかったですー」

すずかも士郎に言葉を発した。

「すずちゃんも、アリサちゃんも、ありがとうなー、応援してくれて。」

帰るんなら送っていいこうか？」

士郎が2人に尋ねる。

「あ、いえ、迎えにきてもらいますので」

「同じくですー」

「そっか。なのははどうするんだ？」

士郎はなのはに尋ねた。

「うーん、お家に帰って、のんびりする！」

「そうか。父さんも家に帰ってひとつ風呂あびて、お仕事再開だ。一緒に帰るか？」

「うん！」

なのはは、笑顔を見せ返事をした。

「じゃーねー」

アリサとすずかはなのはに手を振った。

「また明日ー」

「なのは、また少し背伸びたか？」

「お父さん、この間も同じこと聞いたよ？そんなに早く伸びないよー」

「はは、そうか」

その頃、先ほどの少年のポケットの中が少し光った。

なのはは、出かけた服のままベツトに倒れこんだ。

「なのは、寝るなら着替えてからでなきゃ」

なのはは、いきなり服を脱ぎ始めた。

ユーノは、慌てて後ろを向いた。

「ユーノ君も一休みしておいたほうがいいよー。なのはは、晩御飯までおやすみなさあい…」

なのはは、パジャマに着替えるとベットの上でうつぶせになって目を閉じた。

「やっぱり、慣れない魔法を使うのは相当の疲労なんだろうな…。僕がもっとしっかりしていれば…」

ユーノは申し訳なさそうになのはを見ていた。

「今日も、すごかったね」

「そんなことないよ。ほら、ウチはディフェンスがいいからね」

「でも、格好良かったー」

「あ、そうだ」

少年は、何かを思い出した。

「え？」

「はい」

少年は、ポケットから宝石のような石・・・ジュエルシードを少女に差し出した。

「わー、綺麗ー」

「ただの石だと思うんだけど、綺麗だったから」

少女が手に取ろうとした瞬間、強い光が放たれた。

はっとなのはは目を開けた。

「なのは！」

「気づいた！？」

その頃、少年達を光が包み込んだ。そして、巨大な木が現れた。木の根は、地面をえぐりながら伸びていった。

なのはは、急いで階段を駆け下りた。

すると、お風呂場から父の声が聞こえた。

「なんだー、なのはー、一緒に入るかー？」

「ごめんお父さん、また今度ー！ちょっとお出かけしてきまーす！」

「そうか…。いつてらっしゃい」

士郎は、ため息をついて送り出した。

なのはは、息を切らしながら走っている。なのはは、ビルの屋上へ着いた。

「レイジングハート、お願い！」

なのはは、レイジングハートを宙に投げた。

「Stand by ready. Set up」

その音声と共にレイジングハートが光りだし、なのはは変身した。

「ひどい…」

なのはは、あまりのひどさに声を漏らした。

「多分、人間が発動させちゃったんだ。強い思いを持った者が、願いをこめて発動させたとき、

ジュエルシードは、一番強い力を発揮するから」

（やっぱり、あの時の子が持ってたんだ…。

私、気づいてたはずなのに…。こんな事になる前に、止められた

かもしれないのに…)

「なのは・・・」

ユーノは、心配そうになのはを見つめた。
レイジングハートの先がピンクに染まっている。

「なのは？」

「ユーノ君、こういうときは、どうしたらいいの？」

「え？あ…」

いきなりの言葉で戸惑うユーノになのはが

「ユーノ君！」

追い討ちをかけた。

「あー、うん。封印するには、接近しないと駄目だ。まずは元となっている部分を見つけないと…。

でもこれだけ広い範囲に広がっちゃうと、どうやって探しているか…」

「元を見つければいいんだね」

「え？」

なのはは、レイジングハートを構えた。

「Area Search」

そして、魔方阵を出現させる。

「リリカル、マジカル。探して、災厄の根源を！」

魔方阵が光を放つ、無数のピンク色の光が町へ放たれた。

なのはは、集中する。目を閉じて根源を捜す。

「見つけた！」

なのはは、根源を発見した。

「ホント！？」

「すぐ封印するから！」

「ここからじゃ無理だよ、近くにいかなきゃ！」

なのはは、ユーノの言葉を押し切って言った。

「出来るよ！大丈夫！」

「そうだよね、レイジングハート…」

なのはは、レイジングハートに問いかけた。

「Sealing Mode. Set up」

レイジングハートが問いかけに答えるような感じで音声が発せられる。

そして、レイジングハートの先が槍のような形に変形する。さらに光の翼も生えた。

「いって、捕まえて！」

なのはがそう言うのとレイジングハートの先と後ろにピンクの輪が現れた。

そして、ピンクの砲撃を発射した。

「Stand by ready」

「リリカル、マジカル。ジュエルシードシリアルX！封印！」

レイジングハートから先ほどより大きいピンクの砲撃が発射される。そう、一直線にジュエルシードに向かって・・・

「Sealing」

空はオレンジ色に染まっていた。少年と少女は、ジュエルシードを渡した場所へ戻っていた。

2人は、倒れていて悪夢でも見ているかのような表情だった。少年の手からジュエルシードが

離れ、レイジングハートの元へきた。そして、レイジングハートへと入った。

「Receipt number X. Mode release」

レイジングハートはそう言う白い煙を出した。そして、もとの赤い玉へと戻った。

「ありがとう、レイジングハート…」

なのはは、レイジングハートにお礼を言った。

「Good bye」

レイジングハートは、なのはの掌にゆっくりと落ちてきた。なのはは、私服に戻った。

「僕にも使えない、遠距離魔法…。この子、どれだけ魔法の才能を持ってるんだ…」

「いろんな人に、迷惑かけちゃったね…」

「え？な、何いってんだ、なのはは、ちゃんとやってくれてるよ！」

「私、気づいてたんだ…。あの子が持ってるの…。でも、気のせいだって思っちゃった」

なのはは、その場にしゃがみこんだ。

「なのは…。お願い、悲しい顔しないで。」

元々は僕が原因で、なのははそれを手伝ってくれてるだけなんだから…」

ユーノは、なのはに言葉を発するがなのは、少し顔をうずめる。

「なのは！なのはは、ちゃんとやってくれてる！…なのは…」

魔法使いになって、初めての失敗……。自分のせいで、誰かに迷惑がかかるのはとても辛いです。

そう思ったから、私はユーノ君のお手伝いすることに決めて…

なのはが歩いていると目の前をあのに2人が通った。

その2人は、お互いに手を後ろに回して支えあいながら歩いていた。なのはは、呆然とその場に立ち尽くした…

自分なりの精一杯じゃなく、本当の全力で…。

ユーノ君のお手伝いではなく、自分の意思でジュエルシード集めをしようと思いました…。

もう絶対、こんなことにならないように…

町は、夕日の輝きとは裏腹にとっても静かな寂しさに包まれているようだった…。

第3話 町は危険がいっぱいなのか？（後書き）

どうでしたか？

次回は4話の前に3. 5話が入ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7479r/>

魔法少女リリカルなのは×魔法少女まどか☆マギカ～魔法少女達の軌跡～

2011年4月29日23時10分発行